158014

週刊日米
月曜附錄

定價　一部　十仙
一ケ月　三弗
六ケ月　二弗
一ケ年　四弗

太紙購覽者に限り無料
發行日　毎週土曜日
桑港エス街六五〇
發行所　日米新聞社
電話ブロスペクト二三八

多事多端なりし過去二週間を顧みて

ハワイでの大事件

英佛對米の疎隔と

天涯生

過去二週間内にいろ〜の大事件が起ったが、そのうちに我れ等に一大ショックを與へたのは目も當られず、知事は泣いて天下に救援を求めてゐるハワイの同胞青年の極惡罪業と南加リバサイドの青年ノースカフトの名數少年虐殺件、それにポートリコよりフロリダ州一帯の大颶風災害の慘狀で、われ等の興味をそゝつたものは兩大統領候補の得票問題と英佛海軍秘密協約漏洩に關した米國の憤慨と英佛の輿論怒狀態、それにもつゝ深い。フーヴァーの演說は勞働者に向きの徹頭徹尾經濟本位の軟滑し運動である。それから我れ米國產業および勞働者のためのオークランドの學生少女の主人公和黑政府を訴へ受けた時は全國にこれ賣買婦殺害件に對する判決、失業者六百萬人、米國千三百萬家族の内の四分の一はその富豪等の二人息子で、四年前これも富豪の一人息子を弄殺したローブ及びレオポルド二青年の特赦風評である

福永極惡事件

を論ずるに我れ等は戰慄し畏縮を禁ぜず、なぜんなむごたらしい事をしてくれたのか、我れ等米人にゐるものは過去十年間あらゆる排斥を過去に堪ち、惡戰苦闘を續けつゝも國民中の最良民としてクローンのレコードを殘し、罪惡史に埋もれたものたちこの感へ一つづれにせよ我れ等はこの悲しむべき事件が案外われ等に影響少きを感謝する。

フロリダ風害

颶風雨の災害は日本のみかと思ふと米國をも出抜き……香港米國を敵本國と米米曾有である。フロリダ州のみで死者二千に近く、家屋遊園地パーム・ビーチはほとんど倒壊、洪水は各市に氾濫して數百人の人命が失はれたが、そのうちに我れ等に感慨感冒中存者を襲ひその慘狀は目も當られず、知事は泣いて天下に救援を求めてゐる

兩候補の演說

去る十七日フーバーのニューヨーク（ニュージャシー州）でなしたこの機を利用してこの對米戰爭演說と、その翌ユミスのオハイオ（オブラスカ州）でなした演說は共に重大視されてゐるが、双方を比較して見るとナカ〜興味深い。フーヴァーの演說は勞働者に向きの徹頭徹尾經濟本位の軟滑し運動である。それから我れ米國產業および勞働者のためのオークランドの學生少女の主人和黑政府を訴へ受けた時は全國にこれ賣買婦殺害件に對する判決、失業者六百萬人、米國千三百萬家族の内の四分の一はその富豪等の二人息子で、四年前これも富豪の一人息子を弄殺したローブ及びレオポルド二青年の特赦風評である

福永極惡事件

を論ずるに我れ等は戰慄し畏縮を禁ぜず、なぜんなむごたらしい事をしてくれたのか、我れ等米人にゐるものは過去十年間あらゆる排斥を過去に堪ち、惡戰苦闘を續けつゝも國民中の最良民としてクローンのレコードを殘し、罪惡史に埋もれたものたちこの感へ一つづれにせよ我れ等はこの悲しむべき事件が案外われ等に影響少きを感謝する。

フロリダ風害

颶風雨の災害は日本のみかと思ふと米國をも出抜き……香港米國を敵本國と米米曾有である。フロリダ州のみで死者二千に近く、家屋遊園地パーム・ビーチはほとんど倒壊、洪水は各市に氾濫して數百人の人命が失はれたが、そのうちに我れ等に感慨感冒中存者を襲ひその慘狀は目も當られず、知事は泣いて天下に救援を求めてゐる

兩候補の演說

去る十七日フーバーのニューヨーク（ニュージャシー州）でなしたこの機を利用してこの對米戰爭演說と、その翌ユミスのオハイオ（オブラスカ州）でなした演說は共に重大視されてゐるが、双方を比較して見るとナカ〜興味深い。フーヴァーの演說は勞働者に向きの徹頭徹尾經濟本位の軟滑し運動である。それから我れ米國產業および勞働者のためのオークランドの學生少女の主人和黑政府を訴へ受けた時は全國にこれ賣買婦殺害件に對する判決、失業者六百萬人、米國千三百萬家族の内の四分の一はその富豪等の二人息子で、四年前これも富豪の一人息子を弄殺したローブ及びレオポルド二青年の特赦風評である

福永極惡事件

を論ずるに我れ等は戰慄し畏縮を禁ぜず、なぜんなむごたらしい事をしてくれたのか、我れ等米人にゐるものは過去十年間あらゆる排斥を過去に堪ち、惡戰苦闘を續けつゝも國民中の最良民としてクローンのレコードを殘し、罪惡史に埋もれたものたちこの感へ一つづれにせよ我れ等はこの悲しむべき事件が案外われ等に影響少きを感謝する。

フロリダ風害

颶風雨の災害は日本のみかと思ふと米國をも出抜き……香港米國を敵本國と米米曾有である。フロリダ州のみで死者二千に近く、家屋遊園地パーム・ビーチはほとんど倒壊、洪水は各市に氾濫して數百人の人命が失はれたが、そのうちに我れ等に感慨感冒中存者を襲ひその慘狀は目も當られず、知事は泣いて天下に救援を求めてゐる

米國の不機嫌

米國を出抜き……香港米國を敵本國と米米曾有である。フロリダ州のみで死者二千に近く、家屋遊園地パーム・ビーチはほとんど倒壊、洪水は各市に氾濫して數百人の人命が失はれたが、そのうちに我れ等に感慨感冒中存者を襲ひその慘狀は目も當られず、知事は泣いて天下に救援を求めてゐる

米國の不機嫌

米國を出抜き……香港米國を敵本國と米米曾有である。フロリダ州のみで死者二千に近く、家屋遊園地パーム・ビーチはほとんど倒壊、洪水は各市に氾濫して數百人の人命が失はれたが、そのうちに我れ等に感慨感冒中存者を襲ひその慘狀は目も當られず、知事は泣いて天下に救援を求めてゐる

戰債の帳消し

歐洲ではこの機を利用して米國の戰債の帳消しをして貰はんとの運動は米國の耳を傾くるこの運動は米國の耳を傾くるこの運動は米國の耳を傾くるこ

本年大統領選擧 決勝戰に對する豫見

スミスは秀吉 フーヴァーは元就

サンタローザ　今村敬吉

スミスは意外候補受諾をなして、アルバニーに歸來して後、天下の輿論は如何なりしか。外じはない。彼はゼネラルモーター會社から共和黨員にして、非常酒豪で、勇敢にして、何でもの通り。その上天王教派なるジョンロックフェラーを抜いて民主黨選擧委員長に任擇に及んだ。彼は抑も何故に、何の見るところ、何の考ふるところあつて斯かる奇怪なる行動をなすに至りしや、果また何の期するところあつて之を敢行せしや。請ふ暫らく秀吉に試いて彼の心事を說かむ。

△

四海の役、秋月長門守種長、小熊の城を出で、秀吉の陣に降る。秀吉引見して陣服の禮を受け、從容として曰く「汝の家に檜柴の茶きものあり、名高きものなりと聞く。一目見たきものなり」と。種長使ひを遣はして取り寄せしむ。秀吉これを見て「聞きしにまさる器なり。我に得させんや」と言ふ。「既に胄脫ぎたる上は、何か惜まんや」と。秀吉大いに喜び「久しく我陣にありては軍兵怪しみ危むべし早く歸るべし。汝が我を防ぎしは可なり。今より身の置ひなれば吾に恨みなし。所領本の如くなるべし」といひしが、種長感泣して歸る。種長の士卒、若き吉主人を害せば、その陣に駆け入りて、討死せんものをと、しあはせて今か！と種長の歸るを待ち居りし所なれば、士卒大いに安堵し茶壺の話を聞くに及びて「思ひ寄らぬことよ」といひあひて驚ぶ。これより九州の敵、多く戰はずして降服せり。

△

斯くスミスはラスコップを任用してスミスはウエストである。彼は敵味方なるジョンロックフェラーを抜いて民主黨選擧委員長に任擇に及んだ。彼は抑も何故に、何の見るところ、何の考ふるところあつて斯かる奇怪なる行動をなすに至りしや、輯の奏謀長となし、以て吾が輯を運用して本戰に有終の勝利を收めんとするまこに捉目なる作戰振りである。その次は天機知るべからざる彼の最も智謀に富んだところで、世間のお覺えの高いこと、世間のお覺えの高いこと、世間のお覺えの高いこと

日米文藝欄

日米歌壇

斷崖に立ちて　浦部禮介

聖者のくはた凡愚めく鬱めく秋の千斷れし雲の姿は
百年の後に知己つまでもなく天なる神のみそなはすまゝ
なにもかも切れて久しき彼女の名フミロに出ぬ秋深めばか
近く水の如くそれなり去にしまゝハガキ一葉寄來さぬ好く
語らむと欲ふ心を裏切りて振切る如くそこを去りしが
語らやに別れしこと語り盡せしより胸に火をば投げ入る
歌人の名を廣め得れど鬱うすれ尾羽打ち枯らすここた歌人
拗ね者の一酒徒を以て世を終へるその佛性を活かし給へや
羅城より本名好しと或日アと彼女に言はれ歌めしかき
秋深めば裏切り去れら女さへしみじみ哀しく斬らんとする
こが以上一足に上一足に生命碎かん斷崖に立つ
チエホフの「可愛い女」に恰も似て可愛げ共頼依なき性質

前回脱字訂正

秋景色眺めて後、死なましと言ひつつ果てしその秋は來ぬ

アラスカの旅より　【3】　樹心院眞道

メキシカン濃き香色にギタみ弾くジーヤンデヤラポーイと思はざるけり
グレシヤを吹き渡るく海風身にはしむなりアラスカの海
「パス」ゆけば千鳥ゝきのアリューシヤン一つ二つが浮びて見ゆも
晴やらぬ灰色の雲ものすごく怪物の如ひくくたれをり
かへすべき言葉をふかく秘めてしか涙にうつるアラスカの月
月影のすみで肌ひかるドラドの下を流るゝ水も氷りて
ツンドラの上をブクターわれゆけば小鳥たのしく遊び樂ふも
トタン屋根時雨に響く聞ふけつ憂ねかてにけり戀のいたつき
うち時雨る川の面に浮ぶ紋々は紅鮭のほるしるしなりけり
いつの間に鴨の群は居ずなりぬ沖に紅鮭はゐる頃かな
性慾のなやみ果てし紅鮭の身の捨てどころ川のほりゆく
アラスカの夏の日なかの遇屈にノロケ話も眞面目にきゝて

ダルタにて　月見草

はろ〳〵と大海原に立てるごとつよきしもとにぬかづける我
橋に立ち彼方を遠く眺めやれば仲麿の事思ひ浮びぬ
大いなるものゝ力に誘はれてそのひとときを恍惚となりぬ
この湖は琵琶湖に似たりさはれさは白鷗のなきが我には淋し

初秋　管貞

初秋に靜に海に漂ひつるサラダの濱に故郷をし想ふ
きよりてけぶやき窓や秋ぐもりやに明るめる雲動くなり
サラ〳〵ラ〳〵木の葉ちり初む此頃は吾れに戀しき夏は去りつゝ
今宵若さ諸れば集めりつ國祇ふと出しかを笑びにけり

嫁ぎゆく妹　熊野秋子

想ひをばまばろしこゝ浮び出ぬ汝が美しき娘姿の
袞を今我れの近きに搖寄せつ再びおひぬ汝が面影を
喜びに逆らふ心我れになく優しく強き主婦となれかし

手術を待つ心　村岡玉葉

朝はまたきつれゆかれた手術室死を待つ心かくもあるらし
寂しまゝにつれゆかれた手術室白衣まとへる人にくらしも
しばられつ目もおふわれし一時は命あるまさ倉惜しみぬ
鼻おふひ強きマスイをかぐまじと思ひきも眠り落ちたり
終りなるやゝ路を一人ゆくがごともがきし後は何をもしらず

秋景　星都子

吾が蒔きし菜や人參の芽を出し何かたぬしき秋日和かな
秋の夜の空を仰ぎぬ數ゝめる星ぬりなくひろがりてあり
よべ降ゝ雨雫落止まぬ軒端雀たゞむれて居り
誠みたしゝ集めし本のさばりて暇なき身を悲しみにけり

『わが神』　杉溪生

天津日子を我給ひ汝ゝ表現しアダ父よさよはふ道ぞ貴し
汝ゝ呼び汝に訴ふ一つ道に復れし人生ゝオワシスの福音
我ゝ裏はゝ心ゝもきゝに嘆きつゝみ癒しねがふはつばさの影

銀嶺社九月詠草　増田白紅

朝ゝ夕なる駒ゝ山ゝ秋立ちて日毎に色の變ゝ行くなり
獨り寢ノ寂しきまきのカーテンにさゝやく如く秋の風吹く

峯銀之助

夕づきてこの風やゝに風たれさこゝたも落し庭の無花果
疲せこけし頬をさすりつ時折は淋しきことを思ふなりけり
新米の出づると聞けば故郷のわが氏神の祭思ほゆ
娑々てふ噂の主の晴れやけき笑をし見ればまことなるくらし

山禰貞男

物の名を其からそれへと訊く吾子に教てあればつくる事なし
人の世の腹立つこともまゝあれど吾子としあれば心やはらぐ
貧しさは變らざれども何くれと訊き覺ゆ兒のありて幸なる
赤蜻蛉スイ〳〵とんで二つ三つコスモス咲けりこの秋の庭

古谷志村

土埃かゝれる道端の草むらに黄なる花さき秋とし崇ふ
今年より初入學の兒の歸り涼しき夕べ話にぎはふ
ひと日〳〵朝顔の花輪はそりゆき秋は九月の半ばなりぬ
仕事や、暇になり來てひとりみの友の身の上に喜びあるらし
雨近み月なき今宵外面には暗きをすぢく虫の音低し

日米詩壇

ブロードウエー　高木喜代治

タイムスピルディングは
櫛斜し消失し
群集の飛音はキャバレーの
ジャズ
淫慾と罪惡との扮裝が
握手をする塩面で
電氣廣告はぐる〳〵
自制を失つてしまふ
柔かい觸感を抱いた
わしの小娘の唇は
最新流行のイヴニングドレス
を飾つた陳列窓の
瞬けに投げる陰影の四ッ辻で
短い會話の
第一語にふるへてゐる
小粹な若者は切符賣場の
窓をちよい〳〵覗き
片手を水兵
ズボンのポケットへ入れ
發聲映畫館の大看板の傍で
通りすがりの羊飼に
ドンファンの微笑を送る

無題　山禰貞男

おちて燃ゆ　秋の黄葉
散りて來し　その雲の裏に
小虫一つの　宿りをりつ
葉とともに　燒き消わね
ジジと秋なれば
悲しき小虫

ラフキー・ストライキの
製造店の
砲彈の機にならんだ
シガレットに
矮小な掬掬は手をひつこめて
「チエッ縁起でもねわ」と
舌うちをする

長身のポリスマンは
美味しいアルコールを貪いで
くれる密醸强盜のことを
考へながら
今夜も何事もなかつたと
口笛で
つめたくなりかけた
舗道を一廻りする

秋なれば　秋所都霧

おち葉掃く　秋なれば
今掃きし　今掃きし
うづたかく　又散りて數く
そのあとに　ひらひらと
秋の病葉

掃きためし
火をさせば
煙らねば
いと弱く

秋の木の葉に
細き音たて
木の枝搖りて
ひらひらと

ひらひらと舞ふて歌る
もみぢの色に迷ふてか
花に咲き殘り情みて
蝶も、もつれて追ふてさぶ

口マネには切りがない　渚灰人

これより外なに賣物がない
ないので、お前はこれみ賣るんだね　可愛さうに
ほくは女にそう話しゝた
丁度お前さんと同じやうにね
これより外なにも賣る物がない
ないので
お前さんはこれを賣るんだわ

『燕寄る』　前田保忠作

向ひのオヂサンは云ふ
「君もし清き一票を投ずる權利あらば
かならずスミスを選れること
なにしろ飲み助萬歳の世になるぜ
俺はバールを四つ買つた
時折りは麥給へ
葡萄酒のがあるぞ」と
一雨降れば涼しかろと
晴た青空を仰ぐばかりだ

たちば　松本萬六

裾野の嵐吹きまけば
紅黄茶のもみぢ葉が
さらさら、さらと飛んでゆく
やさしい秋の葉花も

この頃の朝　すみれ

秋霧の晴し明の清しも
○間を撫き朝霧晴しこの空を
羽搏やか蒼は舞ひなり
○夕來れば父の歸り待あぐみ
何時歸るやと等は聞きつゝ
○歸り來て夫は迎ふこの吾子
を　優ゝ腕に抱上げ給ふ
○この夫を此子を思りてこの上
の幸福われにあらしゝぞ思ふ

○つきぬと山の姿のあらはれ
狹霧の晴し明の清しも
○間を撫き朝霧晴しこの空を
羽搏やか蒼は舞ひなり
○夕來れば父の歸り待あぐみ
何時歸るやと等は聞きつゝ
○歸り來て夫は迎ふこの吾子
を　優ゝ腕に抱上げ給ふ
○この夫を此子を思りてこの上
の幸福われにあらしゝぞ思ふ

ね　可哀さうに
女はほくの腕をなでながら
ロマチした
そのとたりた　まつたく女
ほくはよろこんだ
お前のこれの方がほくの筋肉
よりも能律があ　るだらう
だがね　これも　パイキンに
やがて　腐れてしまふんだね
狀されて　きうなるん
お前は　そして
だい　ゆくさき
お前さんの腕は強くて輪もし
いわ
けゝ今に鍛つてきて役に立た
なくはるわ
そうしたらお前さんはきうす
るつもり　ゆくさき
女よ　いつまでたつても　い
つまでたつてもお前のロマネ
には切りがない
ほくは　お前の仲間に　ほく
の半身があるやうな氣がする
それはお前だらうか
あたしは　お前さんの仲間に
あたしの半身がゐるやうな氣
がします

そたはお前さんでせうか
女よ　お前のロマネは　と
うて切りがない
ほくは　切りがない　明かすこの一
夜のうちに
お前も　ほくも　この私娼窟
銀座通りも丸の内とビヂング
も海軍省も
なにかもグルヤグルヤにつぶ
れてしまへばいゝと思ふ
ほくは片ッ端から放火して歩
きたい　狂ひたい。

冷かな月　佐野孤星（サンタバーバラ）

秋をしみんと感じゝ今宵
遅なき大洋に面して
たゞ一人　耽れば
冥想ゝ　耽れば
總しが神秘化されて
さながらパラダイスへと
吸込まる樣な快感
小波の上を走る月の光
夢想はゝ醉ふこの　魂への
唯一の輝きとなり
絶句間なく打返す
疲れ切つた鉛ゝ波の音も
妙なるメロデートなる
戀しき憧れの君は
今何處にか
餘りにそなた高潮だ……
きわ切つた月よ冷淡すぎる
冷やかな月よ
冷やかなお前の心に
俺の眞心が分るまい
この身　吞この　魂
俺はお前のために
ふと我が意識に觸れば
又しても俗界の風
冷たくわが頬み撫て通る。

血潮と果汁　税所都霧

紫に房だ熟れし
菊菊の陽に透かせば
紅の果汁をつゝめり
今　磨きぬ
陽に輝めける
小刀
紫のなり葉切れば
指裂けて滴たりぬ
我が肉の紅き血潮
破れたる紫房の紅の
果汁に混じりて
灰色の土にぞ赤く
にじみて深みぬ

童謡

ダリヤ　月見草

まがきやつわに
ぐん〳〵のびて
ほころびそめたよ
ダリヤの花は

黄色いダリヤが
咲いたなら
一本さつて佛に
赤いダリヤが
咲いたなら

一本たをつて慢さまに
淵紅のダリヤが
咲いたなら
一すじしつて、友の膽

口語歌　都詩友

つゞけるお前の末はさする
○放浪の旅に苦しい生活を
○旅空を吹く秋風が素裸の
彼の女らを追ひまくつてる
○いさゝかの金が欲しさか移民
地で
悲しい旅をつづけるお前は
○乳色の雲が流れてる秋空を
夜の若にぢつと見てゐる
○生業の暮を貧つてるお前達は
表面だけは立派にやつてる
○口先で眞面目さを言ふお前ら
の
心の奥がもつと知りたい
○世間では僕とお前の噂がたつ
た

日米俳壇

虫更けて　下山逸蒼

明け近き霧冷にブランケットたのむ
病院の夜は蒼白う明けて
ルーフの朝日へ患者車で押されゆく
霧空に顔をむけまどろもうとする
このベッドで息ひきをつた人のかず
エキス光線身にそゝぐ刹那の息つめ
安全ソリで入院の顱剃ってゐる
病寝の水さしの水も暮れゆけば
ベッドに仰のき病室の天井讀んでる
嵐に首吊りまつすぐ
にげゆく思念を記きめてゐる
秋夜ポケットのはした饅が鳴る
寒にする顔だちモ一目
手向けし菊が灯に影うくつて
生かされてゐる霧空へ女句をならべる
ステップの夕影にボットルミルク
霧夜渡船て煙突の温みに倚つてる
オーロラ映つした眼がはや醉ふてる
醉ふてる脊中の糸屑をつまんで月夜へ
離れて仕めば何の苦もない
○彼の女らの心にふれてふと仰ぐ
夜空の星の流れ見てゐた
○都合よい時は笑顔で迎へてゐ
の
○世間では僕とお前の噂がたつ
た

不動の姿勢　吼雲主

「不動の姿勢」こ云ふ言葉程私があるからでもあるのだ。
然しいかに考へても「氣をつけヲ」なぞゝいふ言葉位いやな言葉はない。之れは外から我々に強制する言葉である爲に我々の反省する言葉である。
もし我々が反省する爲に我々自身に向つていふ言葉であるとしても「氣をつけヲ」といふ號令は、こんな言葉を用ひたくない。我々は只獸つて我々の内にジッと眺めつたら其れでよいではないか。自分から自分に向つて「氣をつけヲ」なぞゝ云ふ必要がどこに有るのだ。
こう僕が「不動の姿勢」や「氣をつけヲ」ゝ云ふ樣な言葉を攻撃するゝ。
の解く氣で取扱ふ、この傀儡の指揮者が即ち「氣をつけヲ」なる言葉なのやある。
今此處に五十人の生徒が居るとする。選輔士が「氣をつけヲ」ゝ號令を掛ける、五十人が一度にパラと足を揃へて起律する中々立派なものだ。が然し皆は夫々別な事ばかり考へてゐる。
天氣がいゝ、早く學校を終へて野球やテニスがやりたい。今晩は何の御馳走かしら。あの娘の好きな女は今頃どうしてるだろう。今日は散髪にゆかふ。日曜にはは何をして遊ぶ。等々々
汗の湧けや上でいるから、今以て傑出した作品も出來ない
天氣がいゝ。傀儡師は頭から號令を掛けてゐるが。そして自分の命令通り機械の如くよく動く人形を見て滿悦の體である。
嘸愚な彼は此人形の一人一人に生命を與へ、個性を發揮せしめるようなぎゝ決して思つた事は一度だつてないのだ。
之はかれの罪ばかりではない産業革命の結果工場法が生れ、商品の大量製産が發展して來た同じく機に、人間の教育にも擊使ぎいよ工場が出來て、年齢の順に從つて人間の大量製産を生じめるに至つた。此社會に缺點

「氣をつけヲ」なぞゝいふ號令は、僕の此社會制度が大體、僕は此社會主義者ではないが……
僕は此社會主義者ではないが……
人間の個性を發揮せしめない機械的人間を作る。
一年生の時に書いた。型に捕はれてゐない大膽な字や畫はいた。あれを皆所謂筆字の手本や畫の手本やらが、皆ブッ毀はし型にはめて仕舞ふ。
「氣をつけヲ」なぞゝいふ號令の精神が、皆、個性を發揮して仕舞ふのは豈に操のみならんやだ。
青鳥然り、文章然り、藝術然り、人間の生活全部然りだ。一

歸り來て虫更けしランプをすゝるや
獨りで闘てゐる月のいろ
月夜の壁はキリギリス縋らせ
ペーパーで捻つた鑑ビナプを手に月夜
燈のアスベスト熟ゐ史しし音に
赤ペンで印シつけつけ讀んでる

野菊　片井溪嚴子

風きく葉ずれの無花果のかげにまろびね
そぞろ歩きの靴しめりを夜の公園
いちんちの樋音やんだ午後四時
野菜切る手付きを笑られて切る
まち〳〵に野菊ひろがりつゝ咲く徑
貝から拾ふ思出せない老もつ

砂　吼雲主

砂にねて青空に閉づるまなこ
沖を過る船見出した飛法の中
ほ尻大きく白波に立ちたる
汽車を下り來た心を霧に抱かれ
霧に包まれたフキルモアの灯に歸つた
船から船へテープを投げて泣いてる
出船今テープを風に靡かせ
陸を離れた船よ鳴ひび舞ふ
夜霧に消ゐた日本人らしい聲
灯が浮ゐて私の瞳へそを過る自動車

係りから　（三、九、二〇）

◉鬼も角、こい欄が斯うして伸びゆく事快よい嬉びである。更に一段の充實を期するため色々の目論見があるその一は次週から取かゝる事にしたが諸兄姉の助力をお待ちしたい
◉今週は記事の都合で、欄の大部を割かねばならなかつた、次回は變つた體裁で、異色ある内容を盛りお目見得したいと思つてゐる
◉幸前田保忠氏のエッチングを得て、こゝに掲げた、文藝欄には好個のもの。歌人たち外、霜に精進する前田氏の製作が過去三回、林田・東城
◉二百行以内の、短篇創作を毎回掲載したい、爽涼の秋は來て、無なりかに走る折、なにかいゝ作品をお送り下さい。隨筆、それらも加用、詩論、
氏の手によりつゝと欄に太い線を劃してくれた。
◉欄の體裁その他について、不斷助言してくれる人々があり係りは感謝してゐる。擴張以來「立派になつた」との讃嘆言葉、もよりも嬉しいが、心づいた缺陷はドシ〳〵云つていただきたい。
◉最後に、お願ひは、一般お送り原稿ですが、出來得れば片面にハガキ書で願ひたい
そのまゝで文藝の人々に樂々
◉批評、
氏の
横たはつてゐるこの空虚な
宗根裏が……

屋根裏

ギブソン作
飯田昌男譯

一面よりへ續く

イサック　オヽアダア！、なにも詩すこんなんかいやないか
この燒すぶつた地獄の中にお前は決して住むことは出來ない
といいふんだ
そして私としても……
どうしてお前が餓死するのを
しのぶことが出來よう
アダア　私が餓死するを！
どうして私が餓死しなくてはならぬのですか、私は元氣ですす、私は働くことが出來ます
イサック　始めてこの町に來た時は私も元氣だつた、そして働くことが出來た、それでも私は餓死するのだ
アダア　イサックさん餓死ですつて？
イサック　オヽ、あなたが暗がりの中に立つてゐた時は、わからなかつたけれども、ほんとに、あなたは痩せ衰へましたね
實際私にはわからなかつたのです、今明かりで見ます。飢渇にせまられてゐるやうに見ます
あなたは働いてゐるのではありませんか、それとも御病氣なんですか
病氣に働くことが出來ないのですか
イサック　いや、アダア、私は病氣でもなんでもない
たゞ働く仕事がないのだ
アダア　あなたの樣な、仕事になれた人に？
イサック　さうだ、お前も知つてゐるやうに國にゐた頃仕事のあつたつてゐた時は、わからなかつたけれども、ほんとに、あなたは痩せ衰へましたね
實際私にはわからなかつたのです、今明かりで見ます。飢渇にせまられてゐるやうに見ます
あなたは働いてゐるのではありませんか、それとも御病氣なんですか
病氣に働くことが出來ないのですか
イサック　いや、アダア、私は病氣でもなんでもない
たゞ働く仕事がないのだ
アダア　あなたの樣な、仕事になれた人に？
イサック　さうだ、お前も知つてゐるやうに國にゐた頃仕事のあつた時は私は隨分働いたものだ、私の父が死ぬまで、ステフェンが結婚するまでもだが、それ以來私が入れるあたゝかい所はなくなつた
愛のために、でなければ金錢のために、お前こ私を入れるあ小さな家を求めやうとしたが田舎にはそれを見出すことが出來なかつた
それで私は友達から離れて世の中に出るため、他人の中に一人の他人が入り、私の幸運を探すために、私は厭惟なくすべての親いものに對して私の脊をそむけなくてはならなかつた、これまで共に成長して來たもの、私が日光を浴びながら、始めて勝をして以來、少しも變らないものに對しても
アダア　あなたは、それを見出したのではありませんか
イサック　その幸運を？アダア、こゝに横たはつてゐるこの空虚な宗根裏が……
アダア　ですけれど、あなたが國を出た時には前途の希望で滿たされ、町に行つたらきつと十分な仕事があり、私共のホームも見出すことが出來るだらうと云つたのではありませんか
イサック　さうだ、私は期待で一杯だつた、私は元氣であつた、私は立派な肉がついてゐた、私は町の中で、巻煙の翼中で元氣のいゝ男が餓死したり、無數に立並ぶ家々の間を、住む家もなく放浪したりしなくてはならぬとは少しも思はなかつた
アダア　それは何うしてですか
イサック　それは、する仕事がないからだ
勞働することが出來て、十分に食ふことが出來てゐる間は「勞働しないものは食ふべからず」といふのは正しい法だ
あるとき考へた
たが仕事が求めても仕事が一つもない時、またある多くの者は働かなくても富み、十分に食ひ、幸福をむさぼるかと思ふと、一方において老人が、
餓死したり、餓死するのだ
ちは仕事のないために餓死してゐるのを目のあたりに見るとき、凡ての物事がまつたく變つて私の目に映ずるやうになつて來た
お前も知つてゐるだらう、私達のやうな貧乏な田舎者には人生は苦しいものである、若し仕事さへあれば朝は夜明け前から働き晩にも暗くなるまでやれば、幾等錢を儲けることは困難でもあるのだが、仕事がなくては全く……
アダア　あなたが國を出てからまだ一度も仕事がなかつたのですか
イサック　いや、仕事、稱べる程のものにまだ一度もありつかぬ
アダア　それで、あなたは何うして生活して來たのですか
イサック　國にゐた頃はさんなに私に辛抱して二十圓近くの金を蓄へたがお前も知つてゐるだらう
アダア　けれども、そればかしの錢は何の役にも立たぬこはありませんか
イサック　さうだ、それは皆んな、無くなつてしまつた
それを何んなに節約して使つたか誰も知る人はないが
アヽ、私はその少しばかりの錢を寒い、死んだ方がよかつた
アダア　それで、あなたは何うして生活して來たのですか
イサック　國にゐた頃はさんなに私に辛抱して二十圓近くの金を蓄へたがお前も知つてゐるだらう
アダア　けれども、そればかしの錢は何の役にも立たぬこはありませんか
イサック　さうだ、それは皆んな、無くなつてしまつた
それを何んなに節約して使つたか誰も知る人はないが
アヽ、私はその少しばかりの錢を寒い、死んだ方がよかつた
アダア　あなたは、それを見出したのではありませんか
イサック　その幸運を？アダア、こゝに横たはつてゐるこの空虚な宗根裏が……
アダア　ですけれど、あなたが國を出た時には前途の希望で滿たされ、町に行つたらきつと十分な仕事があり、私共のホームも見出すことが出來るだらうと云つたのではありませんか
イサック　さうだ、私は期待で一杯だつた、私は元氣であつた、私は立派な肉がついてゐた、私は町の中で、巻煙の翼中で元氣のいゝ男が餓死したり、無數に立並ぶ家々の間を、住む家もなく放浪したりしなくてはならぬとは少しも思はなかつた
アダア　それは何うしてですか
イサック　それは、する仕事がないからだ
勞働することが出來て、十分に食ふことが出來てゐる間は「勞働しないものは食ふべからず」といふのは正しい法だ
あるとき考へた
たが仕事が求めても仕事が一つもない時、またある多くの者は働かなくても富み、十分に食ひ、幸福をむさぼるかと思ふと、一方において老人が、
餓死したり、餓死するのだ
ちは仕事のないために餓死してゐるのを目のあたりに見るとき、凡ての物事がまつたく變つて私の目に映ずるやうになつて來た
お前も知つてゐるだらう、私達のやうな貧乏な田舎者には人生は苦しいものである、若し仕事さへあれば朝は夜明け前から働き晩にも暗くなるまでやれば、幾等錢を儲けることは困難でもあるのだが、仕事がなくては全く……
アダア　あなたが國を出てからまだ一
イサック　オヽ、アダア！、なにも詩すこんなんかいやないか
この燒すぶつた地獄の中にお前は決して住むことは出來ない
といいふんだ
そして私としても……
どうしてお前が餓死するのを
しのぶことが出來よう
アダア　私が餓死するを！
どうして私が餓死しなくてはならぬのですか、私は元氣であつたのです、私は働くことが出來ます
イサック　始めてこの町に來た時は私も元氣だつた、そして働くことが出來た、それでも私は餓死するのだ
アダア　イサックさん餓死ですつて？
イサック　オヽ、あなたが暗がりの中に立つ

副嶋先生を偲びて

岩永生

一九二八・九・廿・

副島先生入墨の快擧を遂つたのは一九二六年三月であつた。「鐵堂先生行て墨國の曠野に我等の迷別の辭を送つて僅に三年の今日先生の今回の悲運に遭ふとは思はなかつた。

さりとは餘りにその期が早かつたさ。は云へ鐵堂島が在米同胞に大和民族に負く天の使命は早く盡されてゐる。鐵堂逝て消へないものが殘つてゐる事を私は信ずる。

腦野で無殺後十五日目額面の肉は鷄に、肢體は銀蟲に傳へられた、開拓者の末路慘たるものであつた。

先生が在米中鋭いメスを振つて荒療治された傷の痛さに怨を呑んでる途中は私情にかられソラ見たかお鼻で笑ふ奴輩も居るであらう而し民族愛の人として又誠實な人彼を偲ばずには居られない。

すゝ彼の顏の肉を喰つたのは白い鷄であつた。

彼を殺したのは無い人間じゃつた。

彼をメキシコに敲き出したのは排日米人であつた。

而して七十の枯骨鐵堂をして入墨の暴擧をさしたのは在米同胞であつた。

白い墨國の鷄

黑い墨國の人間

赤い米國の排日狼

に語る言葉を私は持たない。

排日狼と墨漢と鷄その大小黑白の差こそあれその心事の利己的なることに於て五十歩百歩である。

彼等に鐵堂を偲ばしめんとするもそは無益の業である。されど血と涙とあるわが同胞骨肉なる在米同胞に向つては然らず。

鐵堂は我等在米同胞のものである。否大和民族の精髓の一である。彼と我との浮沈は一であつて二ゝ無い筈である。

解く觀るとき七十枯骨を起し墨國の驛野に孤軍奮鬪せしめた在米同胞はこの侵に於いて彼の苦闘彼の理想をより深く解し彼のために泣き彼を慰む彼を用ふ處がなくてはならないと思ふ。

彼をより深く解せんとする者は彼の犧牲の精神と民族愛の熱血を知らねば彼を解することは出來ない。

彼が新世界創刊當時既に入墨の壯擧の意圖があつたことを彼の友人に語つてゐた。

更に萬難を排して三年前の入墨の壯擧に出るまでの產の苦を知るならばその心事がよりよく解することが出來ると思ふ。

それは排日の壓迫に原因にしてゐることは云ふまでもない在米同胞が排日の苦難に直面して持つて態度を私は次の三つにわける。

第一種の人は、排日なる人のこと、一文も早く擂じ足元の明るい間に逃るが最上策だと考へ且動いてる人達。

第二種の人は

第三種の人は排日に向つて飽くまで正面突擊をする人々である。

只上三種の中第一種は豚の如く狼の如くその餌をアサフて他を顧みない人々で勿論民族愛の第二種の人は肉彈を生命として壯烈なる側面進擊戰を試みつつある人達である。

第三の人は環境、政治を超越し肉彈を生命として奴隷を奪向ふから投げかけ投げかけ排日黨の胸グサ目けて突擊戰をやつてゐる人達である。

ソラ見たか在米同胞の排日對峙戰の概況である。

解く觀るとき鐵堂島は肉彈黨彼は勿論精神家であつたこの族頭で側面攻擊の總大將さ私はみる。

さは云へ彼の軍旅はあまりに小敗であつた。明瞭馬に襲た內山外海のその衛を本隊參謀指揮官たる彼が一人後に從つたのである。

これは見る事實で世の人の眼に映た副島軍の超然で而し一歩踏込んで彼の軍團を觀る時彼の衛たらんとし又本隊に進に於ける狼太彥大明神たることであつた。

我等は彼の碑を高く築くべきである。彼の英靈は永に南に走せ參ずんさする幾萬の同胞の魂のあることを見のがしてはならない。多くの同胞が彼が軍旅に從ふことの出來なかつたのは、未だ四圍の事情が之を阻止してゐるに過ぎないからである。

彼の眞の意味である

彼の明治の覺氣である

彼の愛民族の絕叫である

彼の犧牲の大精神である

鐵堂の碑を墨國の曠野に高く築く碑を築く運動の早く且盛んなるこそ我等同胞の義務であり且名譽であらうと信ずる。

行詰つてゐる大和民族に最も要するものは鐵堂の魂である。彼の慨歎憤慨はヤムにやまれぬ彼の英氣である。殉難殉職殉生涯を以て我等に示した。長に彼を偲ぶではありませんか。

彼の犧牲の大精神である。

彼の眞の意味である。

彼の明治の覺氣である。

彼の愛民族の絕叫である。

我等は彼に聞くことが多くある。そは何であるか。

運ぶられた憤激の涙の河は一時さ洗して南に流れたのだ。

賣に鐵堂はその犧牲者である。

かく鐵堂を觀る時彼を知ることが出來彼の天來の使命は墨國の曠野に骨を曝して在米同胞の衛たらんことを私は希望する一人である。

行詰つてゐる大和民族に最も要するものは鐵堂の魂である。彼の慨歎憤慨はヤムにやまれぬ彼の英氣である。殉難殉職殉生涯を以て我等に示した。長に彼を偲ぶではありませんか。

彼の犧牲の大精神である。

彼の眞の意味である。

彼の明治の覺氣である。

彼の愛民族の絕叫である。

彼その物語りの一例として一つ私に語らしてください。

ホリスターの田島君を訪ねたことがある氏は墨國發展のため心血を注いでゐる人で副島先生とは淺からぬ關係の人である。

同氏が墨國へ奮發せんとする志したのは排日土地法による大打擊が物質的にも精神的にもまた腹の快男子彼は

『自由の天地が欲しい

自由の活躍がしたい』さ彼の願望そのものは單に彼獨りの願望ではない一九二四年七月以來在米同胞の唯一の心願であつた。

その後の墨國の實情を知る者はそのためにされたけの涙が在米同胞の心の奧にせきとめられてゐるだらうか、されど文の憂鬱の呻吟の聲がナリを潜めてゐるだらうかを知つてゐる。

魂の世界の耳と眼を持つてゐる者にはその唸とその涙の河が聲ろしい凄しい音を立てゝゐるのを聞くであらう。

その呻び聲に耳を傾け、その涙に血を沸して自己の生命を投げだしたのが副島翁で入墨がその學である。

我等は彼に聞くことが多くある。そは何であるか。

彼の眞の意味である。

彼の明治の覺氣である。

彼の愛民族の絕叫である。

彼の犧牲の大精神である